若越郷土研究

40の1

春嶽の英語稽古

山下　英一

この小文は福井藩の藩校明新館教師グリフィスの側から見た春嶽について書くものである。従って筆者の参考にした資料は主に福井市立郷土歴史博物館の春嶽公記念文庫と米国ラトガース大学のグリフィス・コレクションに所蔵のものが多い、筆者はこれまでグリフィスという人の人間としての魅力にひかれて、その生涯の歴史を調べてきた。とくにグリフィスの著した日本についての多くの書物を読んで、明治の日本を知るにはグリフィスの考え方が大いに役立つものであることを知った。つまり明治をその同時代に生きた外国人としてどう見てきたか。グリフィスはその時代の歴史の変遷を系統的に書物で発表してきたのである。これらの底に流れているのは日本人の精神へのあくなき興味にあった。であるからグリフィスの関心はすぐれた人格と実行力を有する日本人に向けられていた。

その一人が春嶽であった。明治という大変革にあたって生みの苦難の時に生涯の仕事をした人が松平慶永すなわち春嶽であった。春嶽の活躍の場所はこの広い日本の江戸に於いてであった。われわれは三上一夫氏の著作を読むことで、幕末維新の政局に越前藩が臨んだ公武合体の議論の歴史的役割をその鋭い分析のお蔭をもって理解することができる。（『公武合体論の研究』他）また小説のような文学のなかでも例えば島崎藤村は『夜明け前』のなかで幕末維新の政情の背景にたびたび春嶽を登場させている。生麦事件は討幕の志士の意気を高め「当時、京都にあった松平春嶽は、公式合体の成功もおぼつかないと断念してか、事多く志と違うというふうで、政事総裁の職を辞して帰国したといい、」（「第一部上」）といった工合にである。

ここで思うことは筆者がようやく春嶽その人への気持の上の接近が始まっていることである。曲りくどい言い方をしたが、春嶽のふところに飛び込んでみようというのである。しかしその力はない。そこで先ず垣間見ることの出来ることから始めるしかない。それには春嶽を直接に知るグリフィスのいることが大きな頼りになる。グリフィスが春嶽をどう見ていたかについて、筆者は誤謬はあっても誤解はないと信じている。外国人だから何をいっても許せるといった不遜な態度よりは、外国人ながらによく見ているといった謙譲な態度を望みたい。外国語または洋学について春嶽がどのような認識をしていたかということも知りたい。

とりわけ春嶽には英語の出来る小姓がいた。出浦（いでうら）力雄である。グリフィスの福井藩雇入の契約についてその日本語と英語の文書作成に直接関与したのが通訳者の出浦であった。また春嶽は出浦からユニオン・リーダーの個人授業を受けていた。明治十四年のことで、明治三年、大学別当と侍読を免ぜ

られ、多年の勲功により、麝香間祇候の待遇を受けて、文筆生活に入ってから十年の歳月がたっている。しかし春嶽の最初の英語稽古はおそらく明治三年頃に福井藩士永見裕（ゆたか）の教授によって始まったと思われる。（「若越郷土研究」三十八巻一号。拙論「沼津兵学校の福井藩員外生」参考）その頃、西周の新政府徴命による上京にともなって春嶽の命により六名の福井藩員外生を率いて沼津兵学校から上京した永見は、これもまた春嶽の懇請により西が開いた学塾、育英舎の塾頭格であった。

以上のようなことで今回の小文は春嶽についてのグリフィスの評価と春嶽の英学についての二つのことを書くことにしたい。

一

春嶽公記念文庫にはグリフィスの未発表のタイプ原稿四篇がある。すなわち、

a　"An Account of My First Meeting with Echizen Shungaku in Tokyo and of Fukui and Going there" by William Elliot Griffis.

b　"In at the Death of Fendalism (A Leaf out of Japan's Modern History)"

c　"Transformed Japan"

d　"Echizen Shungaku"

これらは一九一七年（大正六）、ニューヨーク州イサカのグレン・プレース（Glen Place, Ithaca, N.Y.）に住むグリフィスから春嶽の実子で東京麻布の松平慶民に送られていた。と同時にグリフィスから慶民宛の五通の手紙が出されていた。大正六年六月二日付、同年七月二十六日付、同年七月三十日付、同年八月六日付、同年十月八日付である。

大正六年というと第一次世界大戦が終盤に入って、米国、中国とあいついで対独宣戦をしている年でもあった。慶民からの依頼を受けてグリフィスがよろこんでそれに応じる手紙である。筆者にはまだ慶民からの手紙を見る手掛りがないので、グリフィスの手紙でしか判断できないが、慶民が福井藩の歴史を春嶽の伝記から書こうとして、グリフィスが在住した一八七一年の福井の様子を知る資料とグリフィスの見た春嶽といったような文章を懇請したと察せられる。その結果、送られてきた資料のおそらく一部が今日、記念文庫で見ることの出来るグリフィスの福井在住の印象を書いた原稿、明治初期の福井の写真、春嶽や役人からグリフィスへの日本語の手紙の類であろう。

先にあげたタイプ原稿の「a」「b」「c」は一八七〇年から七一年にかけての福井の事情を描写したものだとグリフィスは手紙の中に書いた。そして手紙のところ〴〵でグリフィスは春嶽への尊敬の気持を伝えて惜しまない。「たしかに、父上は日本国の偉大で先見の明のある人物（The great, far-seeing men）の一人でした。記憶に永くとどめるに値する人物です。」（六月二十一日付）「あなたの父上のごとき立派で偉大な人物（so good and great a man as your father）の名誉と名声に役立つために提供できればこんなにうれしいことはありません」（七月三十日付）と書いている。その原稿「a」だが十月八日付の手紙によると、春嶽と初めて会って食事をした時のことを書いた第一頁が紛失していたという。さいわいにそれを補うべくグリフィスの姉マギー宛の手紙がある（グ

リフィス・コレクション所蔵）ので紹介したい。それは一八七一年二月十五日付の手紙で、午後十一時、「越前春嶽公の屋敷（東京橋場の別荘、筆者注）でアメリカから来た化学の先生のために開かれた盛大な夕食会から帰宅したところだ」で始まっている。春嶽公は小姓（the page）をフルベッキとグリフィスのところへ使わして、四時に来るよう招待した。この小姓というのが出浦力雄であったと思われる。春嶽公の外に五人のお歴々がいた。夕食は洋式で、食卓を飾る美しく大きな花束とはおそらく水仙、梅といった早春の花であったろう。銀、クリスタルガラス、磁器の食器も豪華で、ナプキンとワイングラスも完璧であった。約十か十二品の料理が出た。注文でビール、シェリー、赤ぶどう酒、それにシャンパンが出た。春嶽公は明らかに外国料理に慣れていたが、役人の二人は西洋料理を食したのは最初であった。役人たちはスープを大きな音をたてて食べる。その一人はフィンガーボールの水を飲んだ。けれどもスプーン、ナイフ、フォークが初めてのわりには私や姉さんが箸を使うよりは上手に使った。チーズは「臭い」といって敬遠された。こういう小さいことを別にして、全体として事がうまく運んだ。春嶽公はグリフィスにたび〳〵手紙をくれるよう望む。「雇主」たちはグリフィスの期待以上に歓待してくれて、申し分がなかった。このことがあってグリフィスにとって東京にいる間、春嶽は歓迎してくれる後援者（my welcoming Maecenas）であった。

この原稿「a」が書かれたと思われる一九〇五年は、日露戦争の戦後処理である日露講和条約の調印があり、ラフカディオ・ハーンが死去し、その著書『日本―一つの解明―』が出版されている。グリフィスは福井藩学校（the college at Fukoui、何故かグリフィスは明新館という名称を使わない）の理化教師であった一八七一年、藩政時代の福井を実際に見ているが、ハーンなどは人伝に聞いて書いているという。ハーンがその著書の一冊（『心』一八九六年刊の随想集）を献呈した相手の雨森信成などはグリフィスの生徒であったが、福井城の濠を渡ってすぐの屋敷に住んでいたといいたかった。福井ほど住人がいろいろご馳走を作って食べたり、遊山に出かけたり、浮かれ騒ぎの昼はお祭り、月の晩には踊りといったことが好きなところはなく、その言訳に事欠かない。また福井では東京のように拳銃を持ち歩く必要はない。友人や学生といっしょならば外国人教師の生命は安全である。まさかのときに客人のためなら生命をよろこんで犠牲にするほどで、越前人が日本は刀でなく、万人に適用される法律によって治めるべしと決心した最初の人々であったからだ。これは五箇条の御誓文の第一条の後半の部分「万機公論に決すべし」を意味していて、この誓文の起草者が越前藩士三岡八郎（由利公正）であった。

ではグリフィスは春嶽をどう見ていたか。まず、将軍家の親類筋にあたる上にミカドを尊敬する熱烈な支持者の先頭に立つ人であった。従って、春嶽は新しい政府と辞職を強いられた大君との間の調停の中心となって、真のサムライ、すなわちミカドの召使になろうとした。つづいて春嶽の仕事は横井小楠が最初に日本人学生（甥の二人をグリフィスは教えている、一八六六年）を米国へ急派したのに続いて助力と技能の交換を要求して、お雇

い外国人を採用したことである。陽明学（プラグマティズム）派の横井平四郎は春嶽が政事総裁職の時の助言者（グリフィスのいうspiritual teacher）であった。参勤交代制の破壊を達成したのもこの職にあった時で、大名が消えて江戸が地方の町に変わったのと対照に、ミカドの京都が革命の中心地になったという見方も粗であるがおもしろい。グリフィスは横井小楠の改革的で倫理的な働きを重要視している。小楠の働きが大いにあずかって春嶽の越前は道徳的にも社会的にも最も立派で進歩した、言論の自由な藩として有名になったという。社会的に最下層の非人の人権を認めることを提案したのも小楠であった。

封建時代から培った日本人の約束を堅く守る習慣、すなわち互に義務を果す義理固い習慣のあること、すでに政治の安定していることをグリフィスは米国留学の日本人学生から聞いて知っていた。この最高の保証があったことが米国を離れ、また東京から越前に飛び込んで行く時の正当な理由にもなった。日本のナショナリズムは胎動期でまだ理論の段階であった。軍隊といってもグリフィスが福井の町で経験するのは、陸軍士官に船をエレキ地雷でどう爆破するかと訊かれたり、兵学所の学生がオランダ語から訳した要塞構築の書物を手に、もう片方の手に鏝をにぎって新しい土塁の模型を作っているのを見ることであった。

これまで筆者はグリフィスの原稿「a」から春嶽と越前について興味のある部分を紹介してきた。原稿は十三葉から成るが、町民の住む様子のところで切れていて残りが欠けている。これはグリフィス自身が故意にしたことであろう。最後に強い印象として残ることは、まず第一に春嶽の尊皇精神（これは決して武士道と矛盾しない）、（"reverenced" the Emperor）。次に横井小楠の実践的働き（the reformatory and ethical labors of Yokoi）が春嶽の思想形成に力のあったことをグリフィスははっきり洞察していたことである。そして春嶽がその仕事のなかで外国人教師の招聘に自由と先見の明のあったことを賛美した。グリフィスの書くものはエピソードを工夫した英語文章を通して諸国の読者に日本のありうべき姿を単なる報告記事でなく、魂（ソウル）をもって個性的に表現していったところに最大の特色があり、その精神活動にあやまりは無いと思う。

一九一五年、念願の明治のミカドについての著書の出版があった。（*The Mikado—Institution and Person*）この書物の大きな目的は王政に復古した明治国家の支配者であるミカドを、神格者でなく人格（パーソナリティ）を有する人物として新しい制度のなかでのその実在を具現化することにあった。そこにはグリフィスのいう自己開発（self-development）が働らいていてむしろ違和感がない。これはまたグリフィスの得意とする人物史でもあるが、とりわけ著者のミカドの人格にたいする期待が大きいだけに、外国人のあらわしたすぐれた明治天皇論になっている。この書物には「越前。将来を見通した改革者」（Echizen : the Farsighted Reformer）と題する一章がある。

政治改変については越前春嶽は統一派（a Unionist）であり、ミカドと将軍が協力して施政にたずさわることを提案した。いわゆる公武合体論である。一八六三年（文久三）、

春嶽は御所の勤番を命ぜられ、ミカドの好意と信頼を得て、朝廷の評議に参与する身となった。この偉大なミカド主義者（とグリフィスは書く、Mikadoist）は日夜御所にいて将軍制廃止などの協議をつづけた。春嶽はすべての力が玉座に結集し、一天の君のもとに統一された平和な国が、戦うことなくして実現されることを望んだ。

ここにはまた春嶽の建白書の一つが採用されていて、それが実際にどの建白書かいきなり同定することは筆者には出来なかったが、米国総領事タウンゼント・ハリスの通商談判が始った安政四年頃の外交覚書であろう。これは春嶽の積極的開国論であるが、グリフィスの英文からは春嶽が身命をなげうって意見を述べている様子が伝わってくる。建白書の英文には部分の省略もあって、採用者の都合次第も無きにしもあらずだが、要は日本を外から見る者にとって、春嶽のなかにそれまでの「夷狄」、「邪教」呼ばわりから一転して西洋と友好関係をもって日本を富国強国にする発想の飛躍があったことが何よりも大きな意味があった。

タイプ原稿「d」の“Echizen Shungaku”は資料原稿「a」「b」「c」より一年後に送られてきたようである。この論文は春嶽は偉大な人物であったという大前提のもとで、春嶽の人格について述べたものである。それは伝記のようなものではなく、あくまでグリフィスの主観がとらえた春嶽像であり、いわば文学描写に近い。なかでも興味あるのは春嶽の宗教という文章である。いうまでもなくグリフィスはキリスト教という一つの宗教を信仰していて、日本の神道、仏教、儒教といった教えについてほとんど知っていない。しかし、そういうグリフィスのような外国人にも春嶽は真に宗教的であると感じたという。深く考える人は外形や仮面にとらわれずに眺める。それが春嶽の内面生活にあらわれたのが宗教だというのだ。キリスト教に於ける「悔い改め」というのは「新しい心を持つ」ことであって、誰でも良心を持つ真の人間にはこの招きがやってくる。新思想に精神をいつでも開放して置く、新しい義務の呼び出しに応えるのが魂の宗教（soul religion）である。この偏見のない、新しい思想をとり入れる用意のある真の宗教人が春嶽であり、だからこそ偉大だということになる。グリフィスが良心といっているのは、何ものにも束縛されない自由な心のことであるが、それが現実の問題に出会った時に、事実を正視して、先見の明をもつことのできる心でなければならない。猜疑心をもって見る人にはこのグリフィスの考え方が偏見でキリスト教一辺倒に見えるかも知れないが、これはグリフィスばかりでなく、キリスト教文明を基盤とする西洋人の個性（individuality）も人格もすべてその底にはこの良心の自由（freedom of conscience）のあったことを概略的だがあらためて教えられる。「自由」という言葉の概念には「良心」という根本的な命題が前提にあることを忘れてならないのである。おもしろいのはグリフィスが「良心」というべきところを「魂」という東洋の言葉に置き代えていることで、多少無理があってもよく考えてあるが、春嶽の「魂と宗教」といったことについて、近年になって誰が書いてきたか筆者は寡聞にして知らない。歴史の勉強は単に地面に測量の杭を打ち込むだけではなかろう。そ

の土地から何が収穫され、何が不作であったかを知ることで、そのための耕作者の心を知ることにあるのではなかろうか。

そして今ここでは春嶽その人が耕作者なのである。さらにグリフィスのとらえた春嶽の人格ということではどうであろう。三つの特色があげてある。一、ひるむことのない勇気。二、疲れを知らない勤勉。三、ゆるぐことのない不屈な精神。これらの能力の最高に発揮されたのが、幕末維新の政局の大変動においてであったことは言うまでもない。しかしそれも、グリフィスのいう国家精神を有した、世界的視野を持った国際精神の持ち主、ミカドの国に何が必要かの分かる洞察力を備えた政治家としてであった。友人のアメリカ公使、下田のハリスと江戸のプラインも越前春嶽の人格についてほめちぎっていると書きそえている。それは日本及び日本国民を高く評価する一方、外国人及び西洋文明に正当な価値を置くことでも強力であったからで、グリフィスはこのことに春嶽の非凡なところを見つけている。他方、春嶽の取り柄は日本の名誉と尊厳を解し、日本文明の真実、深さ、強さも分かっていることであった。これらをまとめて次のように書く。ミカドにたいする尊敬の気持、日本の安全と進歩を期待しただけでなく、春嶽はまた日本国中の庶民の向上を願い、外国人にたいして正当な取り扱いを望んだと。

福井藩に住む人々がグリフィスの訪ねた多くのどの藩よりも幸福で病む人が少なく、快適な生活を送っているように見えた。そして春嶽の英雄的指導力のおかげで、藩は静かにしかし着実に改革の仕事を進めているというがこれらの評言を裏付ける実例は確かにあるとみてよい。いつものことだが横井小楠の思想の春嶽に及ぼした力の大きいことをここでも書いてるが、春嶽が最初から何を着るか何を話すかにかかわらず人間性(humanity)の真の価値を見分けていたという。福井藩が庶民教育を「国学の安あがりの防衛」に置いていたといわれるのももっともであった。原稿「a」には雨森信成が登場した。「b」のこの文章には藩校のフランス語の授業を優秀な生徒であった今立吐酔に受持たせたと書く。ついでにいうと、雨森信成と今立吐酔はおそらくグリフィスにとって福井で教えた生徒のなでもっとも、いや唯一の愛すべき少年であったと思われる。これら二人の少年はともに開成学校にしばらく籍をおいたが、雨森は横浜の宣教師ブラウンの塾で、今立は米国留学でともにグリフィスの経済援助を受けていた。その師弟愛はお互いに終生まで続いたのである。

この原稿「d」もまた未完の恨みがあるのは残念だが、シェイクスピアの戯曲『十二夜』から「或者は生まれながらにして偉大なり、或者は努めてやがて偉大を得、而して或者は偶々偉大を授け与えらる。」(坪内逍遥訳)を引用して、春嶽はこれら三つの真理のすべてを満たす偉大な人であったと評したがこれこそグリフィスの炯眼というべきであろう。

二

一八七〇年（明治三）の十二月二十九日、グリフィスは横浜に上陸した。客船オレゴニアン号で横浜から越前福井への旅途に下ったのが、翌年の二月二十一日であり、上陸から福井赴任の旅までの五十五日間を江戸、横浜で過ごした。その滞在の主な理由は福井藩と

の契約書作成であった。

そこでまずその前後の様子をグリフィス日記（ジャーナル）から抜書してみる。

（文字のつづりは原文のママ）

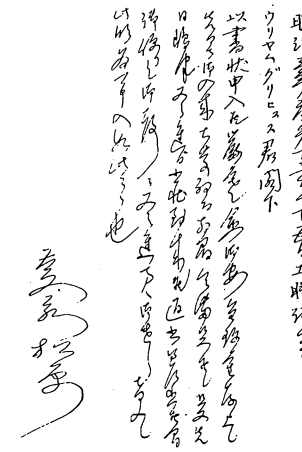
January 25 Wednesday 1871
Idewoora announced the return of the messenger from Yetsizen.

January 26 Thursday 1871
Rose at 7. At 8.30, Idewoora, Suzki & Ito, officers of Prince Echizen came to the house, and we spent an hour together, arranging matters concerning my arrangement at Fukuwi.

January 29 Sunday 1871
In the afternoon, with Mr. Verbeck, called to see the Prince of Jetsizen, at his Yashiki. Spent about three-fourths of an hour there. Saw several chief officers.

January 30 Monday 1871
Evening, Idewoora read the contract with the Foukouwisan Government, and I made a copy of it.

これで分ることは、グリフィスと福井藩の契約に介在して直接にその仕事にあたった人物はグリフィス側はフルベッキ（Verbeck）、福井藩側は出浦（Idewoora）であった。福井藩校雇い教師グリフィスの招聘に骨を折ったフルベッキは当時、南校の教頭をしていた。他方、出浦は春嶽の近侍で、小姓であった。春嶽のことだ。出浦力雄の英語の才能を大いに買っていたと思われる。グリフィスの雇いの条件はフルベッキから出浦に伝えられ、福井藩からの条件は出浦の英語を通じてフルベッキに渡ったのである。日記の一月二十九日は、グリフィスはフルベッキと春嶽をその屋敷に訪ね、春嶽と役人に会っているが、四十五分の短い訪問であった。明治三年庚午十二月十五日（陽暦明治四年二月五日）のグリフィス宛の春嶽の手紙図1（グリフィス・コレクション所蔵）ではグリフィスが春嶽の屋敷を訪ねてきて会ったことをよろこんでいた。従ってグリフィスがゆっくり春嶽と顔を合わせたのは先に述べた夕食の二月十五日であったのだろう。



12th month 15th day of Meji sun nen, Saturday.

Mr. William E. Griffis Esq

I beg to say you are in good health, although the climate is very cold, and I am very glad for this.
Last time, I am glad for your hurring came to my house to see me and my hurring see you.
this letter is an answer to Mr. Simudzy therefore I hope it will be send to Boston

With great respect
Y. N. Matsdaira

（図1）　英文は出浦力雄の訳であろう

次に「東京　明治四年辛未三月十三日（陽暦五月二日）
ウイリアム　イー　グリフヒス　閣下」の春嶽の手紙の一部を抜書きするが、そのなかに出浦の名を見つけることが出来る。

閣下東京ヨリ無恙旅行シテ福井ニ着セラルゝ於余満足シテ且祝儀ヲ述ブ、扨又我子ナル知事ノ管轄セル福井ノ官員ハ、閣下ニ向フテ親切之待遇ヲナシ、又閣下誠ニ敵宜ト及ビ確実ナル家来ヲ召抱エルト、及ヒ閣下ノタメニ居住セラル、家屋ヲ授クルトノ挨拶ヲ申越サレタル吹聴ハ、於余大ナル安心ヲナシテ喜ビニ不堪、福井ハ東京ト違ヒ万事不自由ナルヲ以、大ナル不都合アルベシ、閣下折々故郷ヲ御思ヒ出シ、於本国平素御手馴ノ品物ガ、於福井ハコレナキユヘニ、コレヲ遥想ナサルトノコト、イカニモアルベシ、万々閣下ノ御胸裡ヲ察シ入ルナリ、○福井ノ生徒至極勉強候ヨシ、此生徒ヲ教導アル器械アラサルヲ以テ御国却之旨、伏テ希クハ本国ヨリ注文之器械数品来リ候ハヽ、別テ能々教授ヲナサレ力ヲツクシ玉ハンコトヲ、コレ余ノ深ク閣下ニ望ムユエンナリ、此地ニテ御面会候役人并力雄出浦ヘモ、閣下ノ御伝言ヲ申シ入レタレハ深満足セリ。

（『松平春嶽未公刊書簡集』以下、グリフィス宛春嶽の手紙はこの書から引用する）

異郷で不自由な生活を送っているだろうグリフィスの心境を察した春嶽の心の広さがよく表れた文面ではないか。面白いのは自署が「慶永松平（イヨ）」と外国人にならっていて、しかも「イヨ」とルビが打ってある。「イヨ」はYoshinagaのYoを発音したものだろう。他にもYn Matsudaira ワイ（ヨシ）　エン（ナガ）　マツダヒラといった例がある。些細なことだが、こういうことにも春嶽が新奇な物事を喜ぶ心の持主であることが分かる。

出浦力雄は南校の教官で、フルベッキの通訳にもなっていた。福井の藩校から東京の南校へ移ったグリフィスは、一八七二年（明治五）五月七日、ミカドの南校行幸があって伊東少教授を助手に化学術実験を天覧に供した。グリフィスの外に米英仏独から成る外国人教師十八名が受持の生徒を率いて進講したり、教師の国の言葉で書かせた生徒の作文を天覧に供したりした。生徒は貢進生と呼ばれ、藩命により選抜されて入学した秀才の集まりであった。

『明治天皇の聖徳　教育』（渡邊幾治郎、昭和十六年）によると、

次に大助教柳本直太郎自然地理学大意を述べたる後、教頭フルベッキ教官出浦力雄相竝びて御前に進み、フルベッキ英語を以て人民教育及び勧善学の大意を十分間演説し、出浦力雄之を和解して、天聴に達した。

出浦力雄の履歴については、今のところ出浦の孫（二男の子）にあたる東京在住の出浦宜雄氏から電話でお聞きしたことに限られている。先祖の古い記録を戦災で無くされていて、わずかな記憶から話されたのは福井藩士出浦力雄は一八五〇年（嘉永三）の生れで、春嶽のお小姓であったという。文部省役人、藩費米国留学、長崎検事局検事、英語が出来たので横浜居留地の弁護士の経歴があり、一九二〇年（大正九）七月七日死去。享年七十

歳であったという。菩提寺は東京北品川の曹洞宗天竜寺である。先祖は松平忠直の家来であったともいわれたが、明治二年旧藩制役成にある（『福井市史資料編』）出浦源八郎（三人扶持切米拾八石）が力雄に関係のある人物かどうか不明だが、この源八郎は「文久二戌八月十三日御書院番其儘霊岸嶋御屋敷奉行御武具奉行兼、役中銀五枚年々」という記録を見ると、霊岸嶋は春嶽の江戸屋敷であったところから、あるいはと思ったりもする。

そこでともかく出浦がグリフィスと仕事の上で交際のあった頃にしぼって資料をもとに考えてみたいのだが、その一つが次の出浦からグリフィス宛の英文手紙である。（グリフィス・コレクション所蔵）発信は東京　南校。一八七一年十二月七日付であるが、陽暦であろう。

親愛なるW・グリフィス。

良い機会を得たのでお便りします。あなたの友人で、先週の金曜日に駿河の静岡へ行ったクラーク氏に会ったが、行く前に書いた手紙をあなたに送ってくれと云われました。クラーク氏は静岡へ発つ前に、通訳について交渉するために東京の静岡の屋敷へ行きました。その時、私はクラーク氏から臨時の通訳を頼まれて、いっしょに屋敷へ行きました。屋敷の役人と勝〔安房〕氏は英語が分らず、話せないので、いっしょに行って役人と通訳の交渉をしました。その時、役人は通訳が見つからず、私がクラーク氏の通訳になって静岡へ行くよう推挙されました。しかし私はそれを好みませんでした。私は英語を話すことも理解することもあまりよく出来ません。それに私の家族が最近、上京してきていました。そこでフルベッキ氏が他の通訳を探しましたが、いい人が見つからず、クラーク氏は良い通訳なしで行かねばならず、仕方なく静岡生れの悪い通訳を伴いました。クラーク氏は若くてやさしく、賢明で思いやりのある先生だと思います。静岡の人がクラーク氏を先生にすれば、科学が進むでしょう。

私は大学の大改革のため、南校を解雇されました。それ以来、私はフルベッキ氏の家に居ります。フルベッキ氏とその家族、越前春嶽公も私も大へん元気です。鈴（すず）氏から交換にあなたが肖像写真を送ってくると聞きましたので、次の郵便でそれを私に送って下さったら私から鈴氏に渡します。鈴氏からよろしくとのことです。どうぞ岩淵氏へ私からよろしくとお伝え下さい。

ごめいわくをおかけしますが、学校で本田氏にお会いになられたら、手紙を渡して下さい。

お元気で　　敬具

R・出浦。

筆記体の英文から出浦力雄がきちょうめんな性格の人であったと思われる。その英文は用向を十分に伝えるだけの構成力を持っていた。クラークについてはいずれこの誌上で精しく発表する機会があると思うが、勝安房からお雇い米人教師の依頼を受けてグリフィスが推薦したラトガース・カレッジの親友で、出浦の手紙にもあるように一八七一年十一月、静岡学問所の理化学教師として静岡に着任した。ここで興味あるのは通訳（通弁、通詞）の交渉の話である。南校の日本人教官の多く

はフルベッキと出浦力雄のように外国人教師の訳官でもあった。そもそも南校は歴史をさかのぼると、ペリーの浦賀来航から二年後、一八五五年（安政二）、幕府が設置した洋学所に端を発する。藩校明道館の創立もこの年である。その洋学所が蕃書調所（一八五六年）、洋書調所（一八六二年）、開成所（一八六三年）、大学南校（一八六九年）と改称されてきて、一八七一年（明治四）、南校になった。洋学所設置からわずかに十六年の歳月しかたっていないが、政情は「日米修好通商条約調印」から「安政の大獄」へ、そして「桜田門外の変」を境に、いみじくも蕃書から洋書への名称改変に見るように、開国へと大きく進展を始める。三十歳前半を謹慎を強いられ、満を持していた春嶽の大局をふまえた活動の開始もこの時であった。こういうなかで洋学を考えると、南校はたしかに洋学のメッカであった。これら洋学校で外国語をおぼえた洋学生が当時、最も必要とした通訳の仕事に参加したのである。しかしこの事実の研究はむしろ軽視いや無視されてきたと思われる。出浦のいうあまり資格のない通訳者も、ちょうど質の悪い雇い外国人のように居たのである。さいわい福井藩は東京にフルベッキと春嶽の通訳出浦力雄、福井にグリフィスの通訳岩淵竜太郎というすぐれた通訳者がいた。この二人は大学南校の英語教師仲間であった。

岩淵については拙著『グリフィスと福井』の一七三―四頁に「注」として入れたが、とくにグリフィスが *The Mikado's Empire* のなかで岩淵を最良の協力者として感謝をこめて書いてくれているのはありがたい。そこでこの機会に岩淵がグリフィスに贈った腰の刀のことを追記しておきたい（一八七二年、五月十一日のグリフィス日記から）

「私は小さい時からこの刀を差してきました。私にとってこれは魂も同様でした。お互いの友情のしるしとして、また日本のサムライがいつも刀をわきへ置いてきたという歴史上の記念品として受けてほしい。」こういって岩淵は腰の刀をグリフィスに贈ったという。刀は黒い漆塗りのさやに入った見事なもので、さやは磨いてあり、波形に彫りつけられたいぶし銀のかぶせ金具がついていて、その上には皇室の紋章の桐が浮いていた。柄は白いさめ皮に褐色の絹の真田紐がかけてあった。留金をおおう黒い合金についている象徴は一匹の跳ねる獅子であったとグリフィスは記していた。刀を差すサムライは今はほとんどいない。グリフィスの生徒（南校）はどうかというとみな英語を話し、書き、バーカー教授の化学を暗誦している。もはや通訳は必要でなくなった。そしてグリフィスは岩淵の友情と協力に感謝しつつ、「岩淵はグリフィスの口になってくれた。はじめて知らない土地に来た者にとって、その口は頼りになる手以上のものだった」と書いて通訳の仕事を評価している。

田中不二麻呂が一八七四年（明治七）文部大輔となって教育行政の実質的な最高責任者であった文部省で、出浦力雄はそこの役人であった。東京大学外人履歴書のグリフィスの記録のなかに、「同七年二月十七日より同年八月十六日迄六ケ月間、東京開成学校化学教授とし月俸日本貨幣三百三十円を以て傭継続。」といった半年の契約更新の記録がある。この契約を英文でグリフィスに通達したのが出浦であり、ここにその一枚の文書がある。

（グリフィス・コレクション所蔵）発信は七四年二月三日開成学校となっていた。

東京時代のグリフィスの活動はむしろ教師とは別のところにあった。東京へ移って早速始めたのがニュージャパンシリーズと呼ばれる英語教科書作りであった。その結果一八七二年から七三年にかけて次の四種の出版があった。①*The New Japan Primer,Number one* ②*The New Japan Pictorial Primer* ③*The New Japan Spelling Book* ④*The First Reader of the New Japan Series* このうち④のファースト・リーダーはグリフィスから出浦力雄を通じて春嶽の手に渡っていた。「明治六年五月十七日、ハシバニテ」（東京橋場―筆者注）の春嶽の手紙によって明らかである。

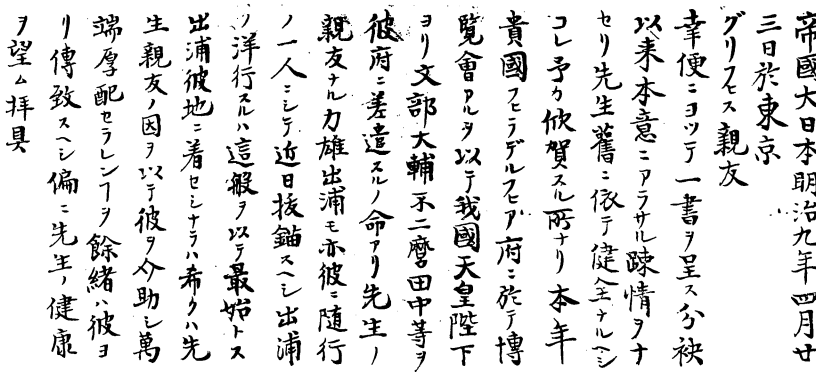
グリフヒス、ノキミ（読点は原文のまま）
コノ、アヒダハ、ワガ、スミダ、ガハノ、
ヤシキニ、キタリ、ヒサシブリニテ、キミ
ニ、アヒツヽ、キミノ、カハリナク、スコ
ヤカニ、ヤスキヲ、ヨロコブ、ナリ、ソノ、
ノチ、キミ、ヨリ、リキヲ、イデウラ、ニ
ヨツテ、キミガ、アラハセシ、アタラシキ、
ジャパンノツヾキノダイイチノ、リードル、
ト、ヤソ、シウシノ、フタツノ、ホンヲ、
タマヒシハ、ワガ、フカク、ヨロコブ、ト
コロナリ、コレヲ、キミニ、アツク、アヒ
サツ、モウシ、ノベ、ソロ、チカゴロ、ア
タラシク、ホリシ、コノ、ホンハ、ジャパ
ンノ、カミヨノ、トキヲ、ミルニ、ベンナ
ル、モノナリ、メヅラシキ、モノナル、ユ
ヘニ、キミニ、オクルナリ、アナ、カシコ
ワイ（ヨシ）　エン（ナガ）　マツダヒラ
（花押）
ウィリヤムイーグリフヒス、ノ、キミ、

「アタラシキ、ジャパンノツヾキノダイイチノ、リードル」とは*The First Reader of the New Japan Series*の訳であるが、春嶽のこのリードルに「亜人グリフィス予ニ送ル所ノ比書籍ハ同氏ノ著スモノナリ、明治六年五月十二日　正二位　松平慶永記」の自書があった。（『若越新文化史』）この片仮名の手紙を読むと春嶽がすぐれた文章家であると思わざるを得ない。それはまず何よりも相手を思い遣る気持が文のすみずみにまで染みとおっていることである。文中の六回に及ぶ「キミ」の使用は英語の語感の素養があることをうかがわせる。それに「ジャパン」のように英語を使って文章に新しい感覚をもたらす。偶然にしてもグリフィスの耶蘇宗旨の本にたいして春嶽の神代の本とは双方の文化の背景もしのばれて面白といったら云い過ぎになるだろうか。例えば耶蘇の本がヘボンとブラウンの『新約聖書馬太伝』（一八七三年）であり、神代の本が笠間益三の『日本略史』（一八七三年）であったかも知れない。

先述の出浦の履歴で藩費米国留学となっていたのは事実と違っていて、実際は米国洋行であった。これは一八七六年（明治九）、グリフィスに宛てた春嶽の手紙図2（グリフィス・コレクション所蔵）によって確認される。すなわち同年米国フィラデルフィアで開催される博覧会に派遣の文部大輔田中不二麻呂に随行して出浦力雄が米国へ行った時は親友のよしみでよろしく頼むというのだ。そして「出浦ノ洋行スルハ這般ヲ以テ最始トス」とあった。田中不二麻呂が帰朝報告として、

『米国百年期博覧会教育報告四巻』を一八七七年に文部省から出版されているので、それを見れば出浦力雄の仕事も分かると思われるが、筆者は未見である。出浦がフィラデルフィアでグリフィスの世話になったかどうか。ニューヨークのユニオン神学校で牧師の勉強をしていたグリフィスはちょうどこの年十月の *The Mikado's Empire* 出版を前に忙しい日を送っていたと思われる。しかしフィラデルフィアには福井の留学生今立吐酔がいてペンシルバニア大学に在学中であった。開成学校で互いに知っている当時二十一歳の吐酔と二十六歳の力雄の再会はあったように思う。

ここまでのところ筆者は幕末維新の政事の大きな要の存在であった春嶽が対外国及び外国人にたいしてどういう精神で臨んだかをグリフィスの観点から考えてみた。そして春嶽が寛大な心の持主であり、将来を見通すことのできた偉大な人物の一人であるとの印象を持った。さらにその人物が今度は直接にグリフィスという雇いの青年教師を相手に互に会って話し、手紙で相手を気遣うなどして外国への理解を深めて行く、そういう春嶽を陰に


帝國大日本明治九年四月廿三日於東京
グリフヒス親友
幸便ニヨツテ一書ヲ呈ス分袂以来本意ニアラサル疎情ヲナセリ先生舊ニ依テ健全ナルシコレヲカ依賀スル所ナリ本年貴國フヒラデルフヒア府ニ於テ博覧會アルヲ以テ我國天皇陛下ヨリ文部大輔不二麿田中芳ヲ彼府ニ差遣スルノ命アリ先生ノ親友ナル力雄出浦モ亦彼ニ随行ノ一人ニシテ近日抜錨スヘシ出浦ノ洋行スルハ這般ヲ以テ最始トス出浦彼地ニ着セシナラハ希クハ先生親友ノ因ヲ以テ彼ヲ介助シ萬端厚配セラレンヿヲ餘緒ハ彼ヨリ傳致スヘシ偏ニ先生ノ健康ヲ望ム拝具
松平慶永

（図２）

なって支えた南校教官、文部省役人の出浦力雄の存在を明るみに出してみたかった。出浦の仕事は一口でいうと通訳であるが、南校教頭フルベッキが人選の中心となった明治初期の外国人教師雇傭の時代に、フルベッキと春嶽の通訳として出浦の果した仕事の重要なことを知った。

昨年の秋、福井市立郷土歴史博物館で学芸員の西村英之さんが礫川文藻（れきせんぶんそう）という紙本墨書の春嶽の日誌の一部を筆者に見せられた。出浦力雄が春嶽にリードルを教えた記録があるという。礫川文藻は全部で一六三冊、明治八年十月一日から同二十三年五月三十一日までの日記である。筆者の見たのはその中の「第四十三号　明治十四年座右日薄第一号」であった。この時、春嶽は五十四歳、小石川水道町の屋敷に住んでいた。その日記によると、

$R_{1前}$一月廿四日　…出浦時雄参邸今日初テ英語習読ス酒肴ヲ仕ス

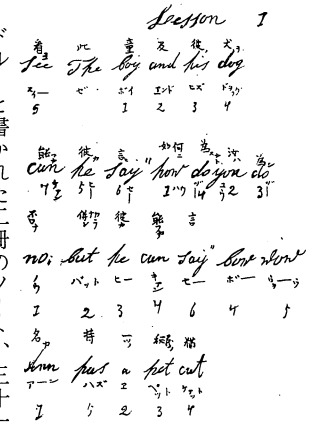
R2二月七日　…出浦力雄本邸英語習読スカ
　ステイラ一箱ヲ送ル
R3二月十四日　…出浦力雄来邸英語習読ス
　菓子出ス
R4二月廿一日　…出浦力雄午後四時拾分来
　邸英語習読ス

そしてR5二月廿八日…と続く。日付の頭についたRは、その日の日記の上の余白についているもので、おそらくリードルのRのしるしであろう。毎週一回の英語の稽古である。

R10後十二月十二日　…出浦力雄来邸英学習読
　ス生菓子晩餐出ス
R11後十二月廿日　…出浦力雄来邸英語習読ス
　本日稽古納酒肴晩餐仕ス謝金五円雲丹等
　送ル

英語または英学習読のあとに出浦は菓子がでたり夕食を馳走になったりしているが、稽古納の夜は酒が出て、おそらく一年分の謝礼であろう五円をもらった上に雲丹を贈って労をねぎらわれている。ちなみに官吏の出浦の月給は九十円、一ケ年千八十円であった。

（明治十三年四月三十日付、村田氏寿宛春嶽の手紙）この英語稽古は松平春嶽筆写の「リードル」と書かれた二冊のノート、三十一丁と二十七丁になって春嶽公記念文庫に保存されている。（図3）習読法は文意をとることを主眼とした漢文素読式に発音をカナでうった当時としては工夫した出浦力雄の教授法であった。使用したリードルはユニオン・リーダーであった。これは一八七二年にニューヨークで出版されたサンダース・ユニオン・シリーズ（Sanders' Union Series）の第一から第四までのリーダーのNo.1であった。著者はCharles W. Sanders（一八〇五～一八八九）といって、十九世紀の米国でマガフィーズ・リーダー（McGuffey's Readers）と並んで最も人気を誇ったリーダーの書き手であった。しかし日本に輸入されて大いに歓迎受容されたのはユニオンであった。それはマガフィーが道徳的、宗教的内容であったのに対して、ユニオンは国家主義、愛国心を編集の意図としていたからであった。明治の国家主義昂揚期には後者の方が好まれたのであろう。春嶽の英語稽古は五十の手習いくらいに思っていいが、明治十八年、初代文相森有礼の欧化主義流行時代を受けて英語の奨励が起こることを、機に敏い春嶽は感じとっていたかも知れない。



（図3）